

を評価できる評価項目にすること。

③ 評価機関が、利用者への中立公正な情報提供のために努力するよう、インセンティブを働かせるしくみをつくること。

④ 評価そのものがコンサルティング機能をもつのはよいとしても、評価機関が同じ施設に評価とコンサルティングを行うような癒着型の事業展開は禁止すること(第三者評価とはいえない)。
などが求められるでしょう。

保育園が親にくれるもの

私にとって、保育園という場所は、ある種のカルチャーショックを与えてくれた場所でした。

保育園を訪れると、赤ちゃんから年長児まで、保育士に慈しまれたらびのびゆったりと、あるいは元気いっぱい潑刺と過はらぎしています。街中で子どもが自由に遊ぶことが少なくなった今、忘れられがちな子ども本来の姿が保育園にはあります。子どもを産む以前の私は「子どもが苦手」で、子どもを産んでからも「子育てが下手」な母親でしたが、保育園に出会い、その「子どもワールド」に(そして、子どもとかかわる保育士の姿に)接して、子どもへの理解を深め、支えられながら子育てへの「耐性」を身に付けていったと思います。

二〇〇二年に実施した「保育園を考える親の会」の会員アンケートで、「保育園の保育や子どもの生活ぶりを知って学んだこと、勉強になったこと」を自由に書いてもらったところ、非常に多くの書き込みがありました。

給食や遊びの充実、精力的な園外保育への感謝の言葉のほか、何人もが書いていたのが、「子どものやる気を大切にしてくれる」「家庭ではつい親がやってしまうことを保育園では子どもにじっくりやらせてくれて」「生活習慣も上手に身に付けさせてもらった」「子ども同士のかわりを大切にしている、ケンカも見守っている」「親とはちがう視点で子どものいいところを見つけてほめてくれる」などのことでした。

これは、私も感じたことですが、一人ひとりを認めること、子どもの主体性を大切にすること、子ども同士のかかわりの中で子どもは育つことを、保育園は親に伝えてくれています。

気ぜわしい現代の生活では、大人はなかなか子どものペースで物事を考えにくくなっています。また、子どもが少なくなり、その発達について全体像が見えにくくなっているために、子どもを理解できなかつたり、子育てのストレスが増したりすることがあります。たとえば、言葉がどんどん話せるようになる二歳児期は、周囲に強い自己主張をするようになりますが、実は「やりたいたいこと」と「できること」のギャップが大きく、かんしゃくを起したり、駄々をこねたりして、親にとっては苦痛なことが多い時期です。でも、このとき、その不合理さこそが成長の証であり、必要なプロセスだということがわかっていれば、親は待つことができるでしょう。

保育園でさまざまな子どもたちの姿、保育士の接し方や子ども観にふれることで、親はたくさん情報を受けて、自分の「子ども観」を修正していくことができます。